The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「ファンシェット」に見るジョルジュ・サンドの政治参加の特徴とその展開
Author(s)	髙岡, 尚子
Citation	Gallia. 2025, 64, p. 91-101
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/102151
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

「ファンシェット」に見るジョルジュ・サンドの政治参加の特徴とその展開[1)]

髙岡　尚子

ジョルジュ・サンドは小説や戯曲、自伝的作品の書き手として知られるが、同時に社会問題や政治的課題についての発言も少なくない[2)]。中でも注目すべき活動として、1848年の二月革命時に臨時政府が発行した『共和国公報』への関与が挙げられる。歴史研究者のミシェル・ペローは、こうした活動の価値が正当に評価されていないことを指摘し、サンドが1843年から1850年の間に公開した政治的論考をまとめ、1997年に『ジョルジュ・サンド　政治と論争』のタイトルのもとに刊行した[3)]。

その後、サンドの政治的要素を扱う研究成果を集めた論集が複数刊行されたが、これらはおもに小説作品などを扱い、そこに見られる作家の政治思想を分析していることが多い[4)]。したがって、サンドが直接的に行った政治的発言を詳細に検討する研究はまだ充分になされているとは言えず、ミシェル・ペローがサンドの政治関与の中に見出した「普遍的な広がりと輝かしい今日性[5)]」を掘り起こし、さらに、私たちが現在取り組むべき社会課題へと結びつけていくことも必要であろう。

そのため、本稿ではサンドの政治的発言の出発点とも言える記事「ファンシェット」«Fanchette»（1843）に注目し、まず、少女ファンシェットがhospice[6)]へ収容された後に遺棄されたことを扱ったこの記事がどのようにして「政治的」なも

1）本稿は2024年6月1日に明治大学にて開催された日本ジョルジュ・サンド学会研究会における研究発表「ジョルジュ・サンドの『政治活動』を考える―*Fanchette*の本質と『ケアの倫理』をめぐって」をもとに大幅に加筆修正を加えたものである。また、本稿は科研費23K00422　の助成を受けた研究課題（「『田園小説四部作』に見るジョルジュ・サンドの政治思想―『ケアの倫理』を手がかりに）の成果の一部である。

2）作家の死後1879年にCalmann-Lévyから刊行された*Œuvres complètes de George Sand*には小説を中心に約90タイトルが収められているが、その中には政治問題に言及した25編の記事（1843-1870）を集めた«Questions politiques et sociales»2巻が含まれている。

3）George Sand, *Politique et polémique*, présenté par Michelle Perrot, Collection Acteurs de l'Histoire, Imprimerie nationale Editions, 1997. 以下、本書からの引用はページ数のみを記す。なお、持田明子による翻訳が『サンド―政治と論争』（藤原書店、2000）として刊行されている。ミシェル・ペローによる指摘は翻訳書の「日本の読者へ」（p.1-3）と題された序文の中に見られる。

4）*Les héritages de George Sand aux XXe et XXIe siècles - Les arts et la politique*（日本ジョルジュ・サンド学会編、慶応義塾大学出版会、2006）や*George Sand : Littérature et politique*, Collection Horizons littéraires, Editions Pleins Feux, Nantes, 2007など。

5）ミシェル・ペロー『サンド―政治と論争』持田明子訳、p.3.

6）フランス語のhospiceは「救済院」と訳されることが多く、持田による翻訳書では「施療院」の語があてられている。だが、この施設は場所によって成り立ちが異なり、施設の持つ機能によっては「孤児院」や「救貧院」といった訳語が用いられることもあるため、本稿では日本語の訳語を決めず、hospiceをそのまま使用する。

のへと連結されるかについて、発表の場となった雑誌『独立評論』*Revue indépendante* の特徴を確認しつつ検討する。次いで、作家が執筆の際に採用した手法を分析しながら、サンドが少女ファンシェットをめぐる事件の本質をどこに見出していたかを明らかにする。それによって作家が考える政治の役割と政治活動の方向性が明確になるだろう。さらに、ファンシェットという年若い女性が問題の中心であることに注目し、ジェンダー的視点も交えつつ、今日の私たちが関心を寄せる「ケアの倫理」が扱う社会課題との関連性を明らかにすることを目指したい。

始まりの場としての「ファンシェット」

ミシェル・ペローは、ジョルジュ・サンドの文学活動と政治との関連性を検討した論考において、『独立評論』に発表された記事「ファンシェット」を「サンドの初めての政治的テクスト[7)]」と位置付けている。この記事がなぜそのようにみなされるのかについては、作家自身が息子モーリスに宛てた以下の記述が参考になる。

> 私は政治に首までつかっています。[...] 私たちはこれから地方紙を立ち上げることになるでしょう。それこそが「ファンシェット」の成果です。『アンドル新聞』は政府支持派の新聞で、私たちを攻撃し侮辱します。ですが、私たちにはそれに対抗するための手段がありません。だからみんなが大きな声で言うのですよ「それが必要だ」と。そう、抵抗するための新聞が必要なのです[8)]。

この箇所から読み取れる重要なポイントは三つあり、この時点でサンド自身が「政治に首までつかっている」ように感じていることが一つ目である。二つ目は「ファンシェット」が書かれた結果として周囲に反響が巻き起こり、新しい地方紙が創設されようとしていること。そして三つめはこの新聞が「政府支持派」に「抵抗するため」の手段であり、その必要性が強く主張されている点である。

この三点について、さらに詳細に検討してみたいのだが、その前に、問題となっている少女ファンシェットをめぐる事件がどのようなものであったかについて、そのあらましを確認しておく[9)]。

7）Michelle Perrot, «Sand, littérature et politique», in *George Sand : Littérature et politique*, Editions Pleins Feux, Nantes, 2007, p.18. 以下、日本語への翻訳はとくに断らない限り拙訳による。

8）George Sand, Lettre à Maurice Dudevant-Sand [Nohant, 17（?）novembre 1843], in *Correspondance*, t.VI, édition de Georges Lubin, Editions Garnier Frères, 1969, p.284. 強調は作家自身による。

9）ファンシェット事件の詳細については、サンドの記事のほか、ミシェル・ペローが本記事に付した解説や Carole Rivière, «George Sand : Une femme engagée en politique», in *George Sand, féministe ?*（Musée George Sand et de la Vallée noire, La Châtre, 2024, p.16-19）などを参照している。

10代半ばと思われる少女ファンシェット[10]に関する事件は、サンドの館があったノアンに近いラ・シャトルを舞台にしており、町の外れで身寄りもなくひとり彷徨っていた彼女を、町のhospiceの若い医師が保護したことがその発端であった。hospiceでは一旦は彼女を預かったが、その後、近隣に住む女性に報酬を渡して少女を託した。しかしファンシェットは何度もhospiceに戻ってきた後に、忽然と姿を消してしまう。謎の失踪を不審に思った医師とラ・シャトルの市長による調査の結果、ファンシェットは何故か馬車に乗せられて町の外へと連れ出されたことがわかる。その後、彼女は100キロ以上も離れた町リオンで見つかり、憲兵隊によってラ・シャトルに戻されて来たのであった。町の人々の間で話題になり、サンドが記事を書くことになったのは、ファンシェットがhospiceから出て姿を消すことになった、その経緯と顛末についてである。

サンドはファンシェットについての記事を1843年10月25日と11月25日の二回にわたって『独立評論』に掲載している。10月25日の記事は、ノアンの隣町モンジヴレの助役を務める農夫ブレーズ・ボナンという架空の人物からの手紙という体裁を採った「ブレーズ・ボナンからクロード・ジェルマンへの手紙」«Lettre de Blaise Bonnin à Claude Germain»（p.67-77）と、作家の署名が入った「『独立評論』誌編集長への伝言」«Communication au rédacteur en chef de la *Revue indépendante*»（p.78-82）からなる。11月25日には、初回の記事に抗議の意を示す「ラ・シャトルの王室検事から『独立評論』誌編集長への手紙」«Lettre de M. le procureur du roi de La Châtre, au directeur de la *Revue indépendante*»（p.83-84）と、それに対する作家からの長文の反論「ラ・シャトルの王室検事への返信」«Réponse à M. le procureur du roi de La Châtre»（p.85-103）が掲載されている[11]。先に引用したモーリス宛の手紙は、書簡集の編纂者ジョルジュ・リュバンの推定によれば1843年11月17日頃に書かれていることから、作家が政治に深く関わっていると自覚したのが、ちょうどこの記事の執筆および掲載時期であり、この件に関する執筆を通じたやり取りを政治的とみなしていることが読み取れる。

次に重要な点は、サンドがこの事件をきっかけに新しい地方新聞の発刊を目論見ていることである。この計画はおよそ一年後に成就し、『アンドル県の斥候兵』*L'Éclaireur de l'Indre*として刊行されることになるが、サンドは1843年12月に本誌の趣意書にあたる「『アンドル県の斥候兵』創設のための回状」«Circulaire pour la fondation de *L'Éclaireur de l'Indre*»を執筆している。その後、自身の全集を編纂する際、「政治的・社会的諸問題」«Questions politiques et sociales»と銘打たれた巻の冒頭にこの趣意書を配置していることから、同紙の創刊が作家にとって「政治的」かつ「社会的」関心と強く結びついていたこと、加えてサンドがこの活動を契機として政治に関わるようになったという自覚を持っていたことも読み取れ

10）この少女はラ・シャトル付近に突然現れ、自身の名前を告げることもできなかったと説明される。そのため、年齢は推定で、ファンシェットという名前も自分で名乗ったわけではなく、便宜的に与えられたものである。

11）ここに示した4つの文書に、さらにサンドの主張を肯定的に裏付ける市長と医師からの短い手紙が付され、その全体が「ファンシェット」のタイトルの元に掲載された。

る。そして、本紙を誕生させることになった直接のきっかけがファンシェット事件であり、それを扱った記事「ファンシェット」だったと言えるのだ。

加えて指摘しておくべきは、本紙が政府や行政機関の側ではなく、それらを監視し、批判する立場を鮮明にしていたことである。サンドは一貫して共和主義者を標榜しており、その政治的態度は作品の中に表明されているだけでなく、それらを発表する際の媒体選択にも影響している。サンドの「初めての政治的テクスト」である「ファンシェット」が『独立評論』に掲載されたのは、決して偶然ではない。というのも、そもそも『独立評論』はサンドが自身の考えを自由に発表するために、社会主義者であり印刷所も運営していたピエール・ルルーらと共に創設した雑誌だからである。サンドは1840年代になるまで、主要作品の多くをフランソワ・ビュロが編集する『両世界評論』*Revue des deux mondes*に発表していたが、小説『オラース』*Horace*（1842）の内容と掲載をめぐって両者は対立することになる。『オラース』の出版に関する契約は1841年6月9日に交わされていたが、原稿は予定通りには掲載されず、編集者が作家に対し、内容に関して部分的に修正するように要求したことがわかっている。書き直しを求めたビュロに対しサンドは、修正は不可能であるとし、次のように述べている。

> ですから『ジャック』や『モープラ』をほんの数ページでも読み返してくれればいいのです。私の書いたもののうち最も「無邪気な」ものであっても、そこにあなたが見出すのは、あなたが支持するブルジョワたちや立派なひとたち、政府の機関、社会の不平等に対する決して揺るぐことのない対抗心であり、庶民に対する変わることのない共感です[12]。

この箇所からは、『オラース』だけではなく、『ジャック』*Jacques*（1834）や『モープラ』*Mauprat*（1837）など、これまで発表した作品がいずれも根底で繋がっており、作家の立場が一貫していることが読み取れる。また、サンドがここでビュロを自分とは立場の異なる陣営に与する者とみなし、政府のあり方や社会的不公正を理由に批判の対象としていることは重要であろう。さらに作家は修正を求めるビュロに対し、「あなたの雑誌は自由なのか、それともそうではないのか？[13]」とも問うており、雑誌や新聞が外的圧力を受けた場合の対応も問題にしていることを、ここで指摘しておきたい。

このような理由で書き直しに応じなかったサンドは、『オラース』の出版契約を10月8日に破棄し、本作を『独立評論』の創刊号に発表する。この時点において、サンドは「庶民に対する変わることのない共感」を、小説を書くという行為によって表現していたと言えるが、2年を経た1843年、作家は同じ『独立評論』誌上において、「ファンシェット」を通じて、さらに直接的な政治的テクストの執筆に踏

12）George Sand, Lettre à François Buloz [Nohant, 15 septembre 1841], in *Correspondance*, t. V, Editions Garnier Frères, 1969, p. 421. 強調は作家自身による。
13）*Ibid.*, p.418.

み出した。その行為は次なる媒体である地方紙『アンドル県の斥候兵』へと結びつき、作家の政治発言手法を成熟させていくことになる。

「ファンシェット」の執筆スタイルとその本質

続いて、サンドがこの記事で用いた手法について確認し、それを採用することが政治的発言とどう関係するかについて、ファンシェット事件の本質と絡めて考察していきたい。

まず指摘しておきたいのは、ファンシェット事件を聞き及ぶにあたって作家が示した反応が強い怒りであった点である。サンドは記事が発表される直前に友人のシャルロット・マルリアニに宛てて書いた手紙の中で、「私たちの眼前で起こった事件について、私は強い怒りを感じる」と述べた後、「私たちが住む地方でも腐敗が恐ろしいほどの速さで広がっていて、その腐敗はいつも «gouvernement» から始まる[14)]」と指摘している。ここから、サンドの強い怒りが「統治・行政機関」«gouvernement» に生じる「腐敗」によって引き起こされていることが読み取れる。そこで、ここからはファンシェット事件をめぐる「腐敗」について詳細に検討することで、作家がこの事件の本質をどのように捉え、その結果、何を告発しようとしていたかを明らかにしたい。

そのためにまず、「ファンシェット」に見られる作家の手法の特徴を確認しておく。上述した通り、「ファンシェット」は大きく四つのパートから成り、その主文とも言える「ブレーズ・ボナンからクロード・ジェルマンへの手紙」は、モンジヴレ村の助役である農夫ブレーズ・ボナンから、名付け親にあてて書かれた手紙という体裁をとっている。この「ブレーズ・ボナン」という架空の人物からの手紙という手法は、その後の政治的テクストにおいても定期的に出現することから、この形式をとって発言することが、サンドにとって重要な選択であったことがわかる。ミシェル・ペローは、『アンドル県の斥候兵』の解説において、作家はこの手法を採用することにより、一般的な新聞などでは取り上げられることのない、地方に生きる人々の声を伝える「仲介者」（p.110）の役割を選択していると指摘する。

では、ファンシェット事件を目の当たりにした人物として造形されたボナンは、この事件の何を問題にし、何を告発しているのだろうか。その書きぶりと内容から、焦点となっているのが hospice におけるファンシェットの処遇と、その扱いをめぐる手続き、さらには事態が発覚した際の関係者たちのふるまいであることが読み取れる。本件のあらましについてはすでに述べたが、この手紙で問題にされているのは、別の場所に預けても何度も hospice に戻って来てしまうファンシェットが「忽然と姿を消して」しまった経緯である。その経緯とは、ファンシェットの扱いに手を焼いた hospice の院長や運営に関わる参事会など関係者が、ミサに連れて行くと話して少女を馬車に乗せるが、実際には報酬を渡して運搬業

14）George Sand, Lettre à Charlotte Marliani, [Nohant, 20 octobre 1843], in *Correspondance*, t. VI, p. 248.

者に託し、目的地オービュッソンへの道すがら、適当な場所に彼女を放置してくるように命じた、というものである。この行為についてボナンは「ひとりの子どもをまるで犬の子か何かのように遺棄させた者たちのことを、私は生涯にわたって非難する」（p.75）と、強い口調で述べている。

少女に対する処遇について非難されるのは、まず、身寄りもなく、自分がどこの誰かであるかを説明することも難しい少女を一旦は受入れながら、意図して遺棄したことである。さらに、このような困難に見舞われた人々を社会全体でどう扱うべきかについて、ボナンは次のように語りかける。

> もしあの娘が死んで当然というのでないなら、それは生きる権利があるということだろう？ [...] それはつまり、あの子にはパンを口にする権利があり、服を着て、住む所があり、世話を焼いてもらって当たり前、ひっくるめて言えば、慈悲を受ける権利があるということだ。（p.70）

困窮状態に陥った人々にも生きる権利があり、そのための手段が与えられてしかるべきであろう、という考えがここに示されている。だが、日々の生活にも手を焼いている一般の農民たちがその役割を果たすのは難しい。ならばそれを担うべきは統治・行政機関であるのだから、その義務を怠っている人々は正しく職責を果たしていることにはならない、というのがボナンの言い分である。

次に、この経緯から読み取ることのできる「腐敗」とは何かについて検討していこう。

ファンシェットが忽然と消えた時、不審に思った hospice の医師は、そのことを問題にし始める。このタイミングで、代議士も兼ねるラ・シャトル市長ドラヴォが、パリから地元に戻って来る。hospice の管理機関の責任者でもあるドラヴォは、ファンシェットの失踪が住民たちの間で騒動の種になっていることを知り、経緯についての詳細な調査を命じるのだが、それについてボナンが「市長は調査を行い、誰に罪があるのかを知りたがった」（p.74）と述べていることは重要であろう。なぜならこの箇所から、ファンシェットをめぐる一連の行為が「罪」であり正当な罰を受けるべきだが、現実にはそうはなっておらず、そこに不正があり、「腐敗」の影が差しているとの考えが読み取れるからである[15)]。

サンドはこの記事を、市長の指示によって行われた調査によって判明した事実や、警察機関の調書をもとに執筆しているのだが、この事件がうやむやにされ、責任の所在が隠されていく過程について、ボナンに次のように語らせている。

15）王室検事への反論のなかで、サンドはファンシェットが放置されたことを「罪 crime」とみなし、「その罪を表現するには新しい表現が必要で、それは «innocenticide» とでも名付けられようか」（p.86）と述べている。«innocenticide» とは作家の造語であるが、この語には、自分の生活を自分で切り開くことのできない少女が、暴力や遺棄の対象になったならば、そのことは「罪」として糾弾されるべきであり、社会全体としての保護がなされるべきとの主張が込められていると言えるだろう。

> 院長は、もし参事官が彼女に強く勧めなければこの件には関わらなかったと証言している。参事会の他の構成員たちは、これは不幸な出来事だが、こんなことをまた蒸し返すのはこっけいなことだと言い、[...] 結局は口をつぐむことに決めた [...]。この案の生みの親である参事官は、侮辱され、中傷された人の体を装っている。[...] 王室検事と副知事は告訴を受取ったが、一言もなかった。この町の立派な人たち（[...]）はみな、この事件は隠さなければならない、と言っているわけだ。（p.74-75. 強調は論者による）

下線を付した部分がおもにこの事件に関わった人物たちで、役職名などから、いずれも町の行政や司法機関において重責を担っていることがわかる。こうした「町の立派な人たち」が進んでファンシェットの遺棄という選択を提案し、人を雇って実行に移し、騒ぎになったと知れるや隠ぺいに走ったことが問題視されるのだ。

このような厳しい批判に対して、相手側からの反発が生じる。11 月 25 日付の『独立評論』には同誌編集長に対する王室検事自身の手紙が掲載され、10 月 25 日に掲載された、ボナンの手紙を補足して書かれたサンドの署名入りの記事は、内容が正確ではない旨の反駁がなされる。それに対して作家は、王室検事の主張を綿密に検証し、証拠に基づいて精緻な反論を組み立て、同じ 11 月 25 日号に掲載する（「ラ・シャトルの王室検事への返信」）。この長文の返答には、ボナンの語りと同様、市長の主導で実施された調査が司法の場で適切に裁かれておらず、その結果、誰も責任を問われることがないばかりか、ファンシェットのみが傷を負っている現状への強い非難が示されている（p.94）。

加えて、この反論において重要なのは、こうした横暴を告発しようとした際に、印刷業者に対して圧力がかけられたという指摘が含まれている点である。作家の署名記事には、この事件を知ったサンドの友人たちが声明文を作成し、三つの新聞に送ったがいずれも掲載を拒否されたことが記されている（p.78）。また、王室検事への反論には、売り上げを少女の援助に充てるため、「ファンシェット」を冊子として印刷、販売しようと計画したが、地方の印刷業者に圧力がかかり、実現されなかったと述べている[16]。この問題は、すでに引用した「政治に首までつかって」いると書いたモーリス宛の手紙に示された内容と直接的に結びつくだろう。この時期のサンドにとって「政治的」であることは、住民たちの生活への配慮が適切になされるような体制が確立されているかどうかを注意深く観察し、その体制が機能していなければそのことを指摘し、必要であれば変更させるための手段を持つことによって可能になる。作家にとって、社会問題についての批判を明確に書き記し、誰もが読み議論に参加できる場所としての媒体を持つことが政治に直接的に関わることなのである。そして、サンドがこの活動を、ボナンという人物を通じて地方雑誌で展開したことも重要である。当時のフランスにおけるメディ

16）サンドは「地方検事様、それでは私に代わって副知事に、なぜ彼が勇敢な印刷業者をこんなふうに脅したのか、と訊ねてみてください」（p.99）と記す。疑問の形を採っているが、明らかに王室検事と副知事への非難と読める。

ア機能のパリ集中は、作家にとって深刻な懸念の対象であった。サンドが『アンドル県の斥候兵』の設立を強く願った理由のひとつがここにあり、同紙を共に立ち上げたデュヴェルネに対し、政治に関わることは自分たちの「義務」であるとしながら、同時にその活動が地方でなされるべきと強く主張している[17]。その際サンドは「パリを道徳の面でも、知的な面でも、政治的な意味でも脱中央集権化する（«décentraliser»）必要がある[18]」と述べ、政治について論じる場がフランスのあらゆる地方に必要であり、そのためには圧力を受けない独立した媒体が必要だと主張する[19]。その第一歩を踏み出すことになったのが「ファンシェット」であり、それをきっかけに誕生した『アンドル県の斥候兵』だったと言える。

ファンシェットと女性たちと「ケア」のテーマを考える

本稿の最後に、サンドが政治的発言の口火を切ったのがファンシェットという少女をめぐる問題であったことの意味について、今日的な問題である「ケアの倫理」との結節点を指摘してみたい。

まず、ファンシェットの属性と状況について確認し、彼女が遺棄されたことによって生じる結果のうち、サンドがとくに関心を寄せていた問題について見ていこう。ファンシェットは「そのあたりの者の誰ひとりとして彼女が誰かを知らない」だけでなく、「自分が誰か言うことができない、かわいそうな娘」であり「子ヤギほどの知識しか持っていない」と説明される（p.69）。そのため彼女は、世間の人々にとっては「何の役にも立たない」（p.70）ことになるが、一方で、彼女は他人に害を成すでもなく、世話されれば穏やかに生活できる人物である。「どうしてこのような子が死んで当たり前ってことになるのか」（p.70）と、ボナンは怒りを込めて語るが、ここには身寄りもなく他人との意思疎通が難しい少女に対する共感と、彼女が窮状を訴えられないために放置されることへの批判が読み取れる。少女は家もなく、食べていく手段も持たず、生きていくためには、偶然立ち寄った場所で出遭った人々の恩情に頼るほかない。ファンシェットは、このように、社会の最底辺にあって他者に依存してケアを受けるしかない存在であり、サンドの眼が、そうした状況に対する施策のあり方に向けられていることがわかる。

次に、作家がとくに注目している点として、ファンシェットが「15歳あまりの若い娘」（p.69）であったことが挙げられる。こうした年頃の少女が路傍に放置されることについて、サンドは彼女の身体が傷つけられる危険を憂いており、そのことは「ファンシェット」の記事全般を通じて示されている。まず、ボナンの口を借りる形で、ファンシェットの運命が次のように想定される。

ファンシェットの運命はよくおわかりでしょう？母親になったファンシェッ

17）George Sand, Lettre à Charles Duvernet, [Nohant, 29 novembre 1843], in *Correspondance*, t. VI, p. 307.
18）*Ibid.*, p.307.
19）この主張の重要性については、ミシェル・ペローによる『アンドル県の斥候兵』の解説（p.109-111）を参照のこと。

トのことを考えてみてください。そして、ここで少しばかり、彼女がこの世に産み落とすことになるかもしれない子どもの運命を思い描いてみてください！いいえ、いけません、ファンシェットを路傍の放浪者たちや荒れ地の狼たちの餌食にしては！それは人間のすることではない、[...]。（p.76）

ここでファンシェットと同時に彼女の子どもの運命が問題とされているのは、この事件が人の口に上り始めた時に、ファンシェットが妊娠しているのではないかという噂があったことが理由である。つまり、身寄りがなく公的扶助からも排除された少女は、その結果として性的暴力の対象となる危険があり、サンドの怒りの矛先は、そうした状況にも向けられていることがわかる。この主張は、「『独立評論』誌編集長への伝言」においても繰り返されており、「けがれ souillure」、「卑劣さ abjection」、「毒 venin」、「売春行為 prostitution」、「汚辱 infamie」といった言葉を用いながら、少女が被るかもしれない深刻な事態への懸念が示される。

では、ファンシェットのような人物が受けるべきケアとはどういうものなのか。サンドは王室検事にあてた反論の中で、それは「行政各機関による保護、医師による手当、県長官による補助、安全な避難場所、政府による救済」（p.98）であり、このような包括的な保護が善意によってなされなければならないと述べる。当時、こうした保護を実践するセイフティーネットの役割を果たしていたのが hospice であった。hospice の成り立ちや機能は地域によっても異なるが、ラ・シャトルでは病人の面倒をみるほか、病気などで働けなくなった人たちを収容し、世話をした後に社会に戻したり（p.68-69）、子どもたちを集めて世話をする保育園のような機能も持っていた[20]。

サンドはこの場所に生じた「腐敗」を告発していくのだが、記事全体をジェンダー的視点から読み直してみると、hospice には実に多くの女性たちが関わっていることがわかる。まずはファンシェット自身が女性だが、hospice で収容者の面倒をみていたのは多くは修道女であり、hospice に預けられた身寄りのない子どもを、養育費をもらって引き取る女性たちもいる。また、こうした状況を近くで見聞きしている農村の女性たちもおり、たとえばその様子は、ファンシェットの窮状を聞き、家に引き取ることを提案するボナンの妻を通じて描かれている。さらには、遺棄された子どもたちを売り買いする老女の存在もほのめかされている（p.81）。こうした女性たちの中で、「腐敗」に関わっているのは院長を務める修道女で、サンドはその行動が周囲の人々の影響によるものだと認めつつも、強く非難している。このように、女性たちの立場や他者に対する働きかけは一様ではないが、ここで注目すべきは、サンドがファンシェットを主人公として描く際に、彼女をめぐる多くの女性たちの関与に言及することで、普段は表舞台には登場しないが、確実に存在する女性たちのあり様を明示している点であろう。

20）ラ・シャトルの hospice については、*La Revue des Amis du Vieux La Châtre* 第 10 号（2018）に掲載された論考、Gilles Marais, « Les établissements hospitaliers à La Châtre du Moyen Âge au XIXe siècle »（p.4-8）や Christian Démocrate et Françoise Aben, « Des enfants abandonnés, des mères et des sages-femmes à La Châtre de 1770 à 1830 »（p.11-17）を参考にしている。

このような、普段はほとんど注目されることのない女性たちの存在に光を当て、彼女たちの行為をつぶさに描き出すという作家の姿勢の中に、現在、私たちが関心を寄せる政治的課題のひとつである「ケアの倫理」との共通性を見出すことができるだろう。

「ケアの倫理」は、1982年にアメリカの発達心理学者キャロル・ギリガンが出版した『もうひとつの声で―心理学の理論とケアの倫理[21)]』に端を発することが知られているが、その後、多くの論者によって理論が精緻化されて現在に至る[22)]。この理論において当初から一貫しているのは、おもに近代以降の社会において、空間が公私に二分され、そこに男女二元論が組み合わされた結果、空間と役割規範がジェンダー化され、その状況が固定化されてきたことを問題にする点である。男性主導で運営される社会においては、基本的には公的空間における活動は男性が担い、それを下支えする私的空間での営みは女性の役割となるが、問題とされるのは、これらジェンダー化された営みが評価のうえで同一ではないという点である。ギリガンは、女性が社会の求めるジェンダー規範に従おうとすると、「その社会で＜善い女性＞と認められる態度や特徴のために、心理学的にはその道徳能力が未発達[23)]」だと判定され、深刻なジレンマに陥ることを指摘する。そのため、劣ったものとされるために聞きとられないままになっている女性たちの声をすくい上げることで、そこに含まれる別の倫理の可能性を問いかけようとしたのである。ここで劣ったものとされるのが、公的な場での活動に比して些末ともみなされる日常的な様々な行為（この多くが「ケア」に相当する）と、そうした行為を行う際に選び取られる判断であり、この一連の営みが「ケアの倫理」として認識されるようになった。近年とくに「ケアの倫理」が注目されるようになった理由として、コロナ禍などの経験から、社会を維持し動かすために不可欠な「エッセンシャルワーク」が、ひとを日常的に「ケア」する行為であることが認識され、その価値を社会的に問い直す必要が認められるようになったことが挙げられる。さらに現在、この問題に関する関心が政治的課題として論じられるようになっていることも重要であろう[24)]。

こうした研究の深化の結果、「ケアの倫理」が提起することになった問題点はさ

21）日本語訳は岩男寿美子により『もうひとつの声：男女の道徳観のちがいと女性のアイデンティティ』（川島書店、1986）として刊行された。2022年、原著出版以降のケア論の展開をふまえた新訳『もうひとつの声で―心理学の理論とケアの倫理』（川本隆史・山辺恵理子・米典子訳）が風行社から刊行されている。

22）アメリカではノディングスや、ラディク、ヌスバウム、ヘルド、さらにはキテイやトロントら多くの論客を生み、その影響はフランスにも及ぶ。モリニエやロジエのほか、ブルジェールの著作は日本語にも翻訳されている。日本でも岡野八代をはじめ、文学研究分野では、小川公代の『ケアの倫理とエンパワメント』（講談社、2021）や『世界文学をケアで読み解く』（朝日新聞出版、2023）などがある。

23）岡野八代『ケアの倫理―フェミニズムの政治思想』岩波新書、2024, p.18.

24）『フェミニズムの政治学―ケアの倫理をグローバル社会へ』（みすず書房、2012）などの著書がある岡野八代は、『ケアの倫理―フェミニズムの政治思想』において「ケアの倫理」を基に民主主義の現代的なあり方を問い直し、さらにその問題を平和論や環境論へと結びつけている。その中で岡野は「ケアに満ちた社会に向けて政治を動かしていく」（『ケアの倫理―フェミニズムの政治思想』、p.23）ことの必要性を指摘する。

まざまあるが、サンドの姿勢と最も大きく響き合うのは、作家の政治的活動が書くことを手段としており、その際に、社会的に見えない状況にある立場から発言する、という形態をとっている点である。これはギリガンが「もうひとつの声」を聴きとろうとした態度と通じ合うところがあり、サンドは語ることのできないファンシェットの声を、自らが仲立ちとなって、その窮状を訴えると同時に、人間にとって根源的に重要なケアのあり方とその必要性を問いかけている。その際に、少女という社会的に最も脆弱な存在が出発点となり、その周辺にいる多くの女性たちとその働きを明るみに出していることも重要であろう。もちろん、当時の社会において、このような発言を自由に行える女性が多くなかったことは事実で、ジョルジュ・サンドは作家という特別な発信手段を持つ存在であった。だが、サンドは公的な社会において男性役割を果たす「作家」としての一面を持ちながら[25]、同時に、私的空間において「ケア」を実践する女性であることにも自覚的であった[26]。とくに「ファンシェット」が執筆された時期は、自身の地所の管理はもちろんのこと、青年期を迎える子どもたちや同居していたショパンの日常的なケアのほか、ノアンやラ・シャトルの住民たちの日々の生活にも心を砕いていた。

こうした観点からあらためて「ファンシェット」という記事の成り立ちと内容を振り返ってみると、社会の中で最も弱い存在を出発点として、あるべき社会の姿が構想され、その実現の必要性が訴えられていることがわかる。また、こうした社会が実現されるためには、現状が変えられなければならず、そのためには修正を求める声を発信するための媒体が必要となる。この一連の過程を作家自身は「政治的」ととらえており、それは私たちが現在「ケアの倫理」を政治的課題ととらえ、理論として成熟させていこうとする姿勢と通じ合っているのではないだろうか。さらに、「ファンシェット」の直後に、同じように地方に生きる人々の日常を題材とする「田園小説群」が続けて発表されたことを考慮に入れれば、これらの作品群もまた、「脱中央集権化」のほか「ケア」の論点も加え、あらためて「政治的」視点から読み直される可能性を持つことが示唆される[27]。こうした新しい読解を導くためにも、作家にとって最初の政治的テクストである「ファンシェット」は、今後も幾重にも読み解かれる必要があるだろう。

（奈良女子大学教授）

25）とはいえ、当時の状況からサンド自身が立法や行政といった領域に参入できなかったことは明らかで、そのことについては «Grâce à Dieu, je suis femme et ne comprends rien aux lois que les hommes ont inventées»（p.98）と、皮肉交じりに述べている。

26）サンドの政治活動と性別役割の関連については、すでに言及した Carole Rivière の論考やミシェル・ペローの解説（p.39-48）のほか、拙論文「政治的言説とジェンダー—1848 年のジョルジュ・サンドをめぐって—」（『欧米言語文化研究』No.5, 2017, p.109-128）を参照のこと。

27）サンドの作品と「ケア」の関連については拙論文、「ジョルジュ・サンドの小説作品におけるユートピア空間とジェンダー—「ケア」のテーマをめぐって—」（『欧米言語文化研究』No.8, 2020, p.79-99）、「ジョルジュ・サンド『愛の妖精』にみる「ケア」の様相とその意味」（『欧米言語文化研究』No.9, 2021, p.143-162）、および «Rendre visibles les interdépendances : sensibilité à l'environnement et *care* dans les romans de l'année 1845（*Le Péché de Monsieur Antoine* et *La Mare au Diable*）»（*Cahiers George Sand*, No.46, Les Amis de George Sand, 2024, p.117-128）を参照のこと。